

プロシーディング

古代エジプトの子供たち
— ナイルのほとりに生まれて —

内 田 杉 彦

明倫短期大学 歯科技工士学科

The Children in Ancient Egypt
— Born on the Nile —

Sugihiko Uchida

Department of Dental Technology, Meirin College

要旨

古代エジプト社会において子供たちは、大人の社会的役割を引き継ぐべき後継者として重要視され、妊娠と出産、子供の成長には大きな関心が払われていた。子供時代は大人となるための見習い期間であり、学校教育も職業教育のひとつであった。

キーワード：古代エジプト、妊娠、出産、子供、教育

Keywords: Ancient Egypt, Pregnancy, Childbirth, Child, Education

1. はじめに

不毛の砂漠に囲まれながら自然の恵みにあふれるナイルのほとりで暮らした古代エジプトの人々は、自然界の生命力に対して畏敬の念を抱いており、ナイル流域の豊かな自然が砂漠の只中で保たれているように、生命の力は、究極的には死に打ち勝つとする信仰が生

み出された。¹⁾ 国土を甦らせるナイルの氾濫、季節ごとに芽吹く植物、夕べに沈み、朝には昇って「死」と「再生」を繰り返す太陽は、自然界にこうした生命力が確かに存在することを示す証にほかならなかった。

当時の人々が日々の生活においてまのあたりにする生命の誕生、生命のさまざまな営みも単に神秘的であるばかりでなく、世界の創造や宇宙秩序（マアト）と結びつけられた。たとえば「創世説話」の中心をなす「ヘリオポリス神学」では、世界の創造は、神々による「生殖」と「分裂」のプロセスとして説明され、創造された後の世界も、日々「再生」するとされている。²⁾ 夜の闇を

表 1. 古代エジプト年表

先王朝時代（紀元前5500～3000年）
王朝時代（紀元前3000～332年）
初期王朝時代（第1～2王朝：前3000～2686年）
古王国時代（第3～6王朝：前2686～2181年）
第一中間期（第7～11王朝：前2181～2025年）
中王国時代（第11～12王朝：前2025～1795年）
第二中間期（第13～17王朝：前1795～1550年）
新王国時代（第18～20王朝：前1550～1069年）
第三中間期（第21～25王朝：前1069～715年）
末期王朝時代（第25～31王朝：前715～332年）
ギリシア系王朝時代（前332～30年）
ローマ支配時代（前30年～後395年）



図 1. エジプト略図

払う太陽（太陽神）は、原初の混沌の闇を払うという「創世」の最初の営みを繰り返していると考えたのであり、太陽神自身も天空の女神ヌトによって毎朝、生み落とされると信じられたのである。

2. 妊娠、出産、育児³⁾⁴⁾

人間が生まれ、成長し、さまざまな人生を経た後に寿命を全うして来世に去っていくというプロセスもまた、神聖な宇宙秩序の一環とされた。古代エジプトの人々は、生殖や妊娠のプロセスとそれによる新たな生命の誕生を、そうした意味でも真摯に受け止めていたことだろう。創造神クヌムが個々の人間の誕生にも関わりを持つとされ、⁵⁾ 輻輳^{ろくごう}の上で人間とその生命力（カ）を形作るとされていたのもそうした考え方のあらわれにほかならない。また高齢者のための公的な社会福祉制度が存在しなかったその当時は、年老いた親を養い、死後にその埋葬と供養を行うのはもっぱら子供の役目とされていたから、男女が結婚して子供をもうけることは老後の保証のために当然とされ、人生における主要目標のひとつであった。

それゆえ受胎と出産には高い関心が払われており、たとえば当時の医術文書には妊娠の判別法がいくつか示されている。⁵⁾ そのなかには、女性の脈を観察する方法、月経がとまり「つわり」が起きることを妊娠の徴候とするものなど合理的な判別法も含まれるが、呪術的な方法も用いられた。たとえば紀元前1200年頃の『ペルリン・パピルス』には、妊娠が疑われる女性の尿を大麦と小麦に振りかけ、大麦が発芽すれば男子、小麦が発芽すれば女子が生まれるとする方法が記されているが、これは古代エジプト語の「大麦」（イト）と「小麦」（ベド）の文法上の性別を人間の性別と結びつけた呪術によるものとみられる。妊娠祈願も古くから行われており、テーベ西岸デイル・エル＝バハリにあった女神ハトホルの礼拝堂には、多産を象徴する裸体の女性像など数多くの供物が奉納された。⁶⁾

また、神々ばかりでなく身内の死者も、子孫に子供が生まれるよう助けてくれる存在とされていた。古代エジプト人は、亡き近親者にあてた「書簡」をパピルスや供物容器に記し、墓に置くという習慣を早くから持っていたが、そのような「死者への書簡」のなかには妊娠祈願のために記されたものがいくつかみられる。たとえば紀元前2000年頃のその種の「書簡」には、ある男性が亡き父親に宛てて、自分の妻と姉妹に「健康な男の子」が生まれるよう力添えをしてほしいと願ったくだりが記されている。また、墓の副葬品のなかには、子供を抱く母親の像や裸体の女性像、寝台に横たわる母子を表現した像が数多くみられるが、これらにも妊娠の祈願が込められていたと思われる。事実、中王国時代に作られた母子像のなかには、自分に子供を授け

てくれるよう亡き父親に願う女性の言葉が記されているのである。子宝に恵まれるか否かは当時の人々にとってまさに切実な問題だったと言えよう。

妊婦は、出産が近づくと特別な「産屋」、すなわち住居の屋上や庭園に設けられた「あずまや」か、住居の内部に作られた「産室」に隔離された。新王国時代の絵画には、ブドウの蔓や花束で飾られた「あずまや」で新生児に授乳する母親の姿を描いたものがいくつかみられる。妊産婦はこうした「産屋」の床に置かれたレンガの上にしゃがんで出産をし、年長の女性が「産婆」として付き添った。

出産は母体と新生児の双方にとって大きな困難と危険をとまなうのが常であり、安産を促すため妊産婦が腹部をマッサージする方法がとられていた。また紀元前1500年頃の医術文書『エーベルス・パピルス』には、安産を促すためのさまざまな内服薬や座薬、湿布の処方が記されている。しかし当時の医術は未発達であり、衛生状態も劣悪だったため、妊産婦や胎児、新生児が命を落とすことも稀ではなく、いくつかの墓地に埋葬されていた子供の遺体の調査結果によれば、胎児の約20%が死産となったと推定されている。⁷⁾ 人々は呪術に頼らざるを得ず、流産はしばしば悪霊や魔物の仕業とされて、それらを防ぐ呪文が唱えられた。また安産の護符として子安貝をつらねたガードルや、さまざまな守護神の姿が刻まれたブーメラン形の護符（いわゆる「魔法の杖」）が用意された。⁸⁾

出産がすむと、母親は「清め」のため赤子とともに「産屋」で一定の期間を過ごしてから、家族との生活に戻った。しかし出産後も子供の生命は大きな危険にさらされており、感染症などが原因で新生児の20%が1年以内に死亡、さらに30%が5歳になる前に死亡したものと推定されている。⁷⁾ 一般に古代エジプト人の家庭は子だくさんであり、たとえば新王国の王墓を造営した職人の村、デイル・エル＝メディーナでは、6～7人の子供を持つ夫婦が一般的だったが、これはひとつには、乳幼児の死が稀ではなかった当時の状況を反映したものとと言えるだろう。

新生児には、母親か父親によって名前がつけられた。名前は人格の一部であり、現世における生活だけでなく死後の復活・再生のためにも不可欠なものとされていたが、この命名という行為によって子供たちは、秩序（マアト）に支配された世界に正式に受け入れられたと言えるかもしれない。古代エジプトの人名のうち最も一般的だったのは神々の名前を含むものであり、そのなかには名前の所有者と神々の良好な関係を示したもののや、名前の所有者に対する神々の加護を願ったものが数多く含まれている。このような人名はおそらく、子供を神々の保護下に置くことで災いから守ろうとするものであって、そこには我が子が生き延びて無

事に成長することを願う親心がみてとれる。

新生児に授乳するのは多くの場合、言うまでもなく母親であったが、中流以上の家庭の場合には、乳母が代わりをすることも稀ではなかった。上流家庭の乳母の身分は高く、特に王家の子供たちの乳母は高官や貴族の妻女から選ばれたが、そうした乳母の子供たちは王子や王女の乳兄弟・乳姉妹として宮廷でともに養育され、成長すると廷臣や女官へと取り立てられた。とくに王子のひとりが王位につくと、その乳兄弟はしばしば新王の側近として権勢を振るうこととなった。王家や上流家庭の子供たちの場合、乳母のほかにも子守や男性の養育係の世話を受けており、一般家庭の子供たちに比べればはるかに恵まれた環境のなかで育てられていたことは確かである。

しかし当時の子供たちが病気や死の危険に絶えずさらされていたことは確かであり、それは庶民ばかりではなく上流階級の場合でも基本的には同じだったと言える。とりわけ子供の病気に関しては、神頼みや呪術が主な対抗手段であった。病気は夜になると忍び寄ってくる魔物や悪霊の仕業と考えられており、眠る子供をそれらから守るため、母親や乳母が唱えた呪文がいくつかわれている。⁹⁾ また、子供を病気や毒蛇、サソリなどから守る呪文が記されたパピルス巻物を筒に納め、護符として子供の首にかけられる習慣もあった。

3. 子供の社会的役割³⁾⁷⁾

さて、古代エジプトの貴族墓の壁面を飾る浮彫や壁画、そこに安置されていた彫像には、墓主である貴族夫妻のかたわらに、彼らの子供の姿がみられる場合が少なくない。そこでは子供は男女ともに裸体であることが多く、しばしば指をくわえた幼児独特のしぐさをしており、坊主頭か髪房を垂らした髪形をしている。このような子供の図像表現は、当時の子供たちの外見をある程度反映したもののだろうが、昼夜の温度差が激しいエジプトの風土や、当時の子供服が遺物として出土している事実からすれば、子供の日常的な姿とは考えられない。古代エジプトの墓の浮彫や壁画、彫像に表された人物像は、墓主の貴族をはじめとする死者の霊が宿る「肉体」の役割を果たしたとみられており、表されている人物の概念、社会的立場や身分を表すための記号的な表現と言える。¹⁰⁾ 指をくわえた裸体の子供の姿も、「子供」を表す古代エジプト文字にみられるものであり、「大人」と区別された「子供」の概念を表現しているとみることができるのである。

墓の浮彫や壁画にはまた、墓主である貴族のために行われる多様な活動、農作物の収穫や漁撈、家畜の飼育・屠殺などの場面がしばしば表されている。このような場面は、貴族が望んだ来世のイメージであり、彼が権力者として過ごした現世の生活が投影されたものと言

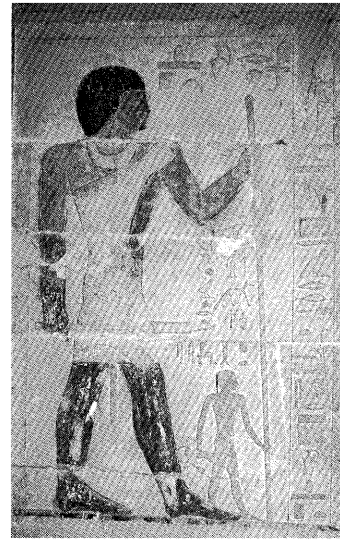


図2. 貴族と息子：古王国時代の貴族墓浮彫

える。¹⁰⁾ そこには小作農民や牛飼、役人、召使いなどさまざまな人々の姿が描かれているが、これは貴族の支配下にあったそのような人々の立場や役割を示す表現にほかならない。彼らのなかには大人の仕事を手伝う子供の姿もみられる。たとえば第12王朝時代の豪族ペピアンクの墓の浮彫には、鋤を引く牛を棒で追う少年と、調理場で手伝いをする少年の姿が表されており、¹¹⁾ 新王国時代の墓壁画には、農作業を手伝う子供たちの姿がしばしばみられる。¹²⁾ これらもまた、当時の社会において子供たちに課されていた役割を表現したものとと言えるだろう。

当時の農民をはじめとする庶民の子供たちは、大人たちが社会で果たしているさまざまな役割を引き継ぐための「職業訓練」を受けていたと言える。男子は、将来は父親の後継者となるか、少なくとも妻子と両親を養えるような職業につくのが当然とされており、そのため早くから父親の仕事を手伝い、あるいは周囲の

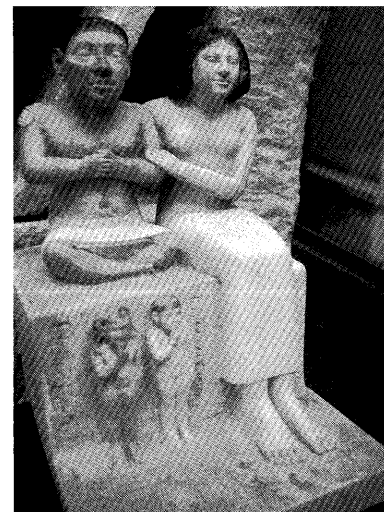


図3. 小人のセネブと妻子：古王国時代の彫像（エジプト博物館〔カイロ〕所蔵）

大人たちに混じって働くのが普通だった。一方、家の外で何らかの職業に従事するのはおおむね男性とされていたから、少女たちの将来は、結婚して子供を生むというものにはほぼ限られていた。女子は母親のおこなう家事、すなわち家禽の世話や料理、子守などを手伝い、収穫の季節には落ち穂拾いのような軽い仕事をする事で、やがて主婦となるための見習いをしたのである。男女の子供に期待される社会的役割がこのように異なったため、男子にくらべて女子の結婚は早く、10代前半で人妻となる例も稀ではなかった。

子供たちはまた両親から、人として守るべき倫理・道徳、目上の人々や年長者に対する敬意、神々や祖先、国王に対する信仰など、当時の社会秩序のなかで暮らしていくための常識も学んだことだろう。庶民の子供たちが受けていた「教育」は、こうした職業訓練や社会常識の学習におおむね限られていた。貴族の墓の壁画や浮彫に描かれている庶民の子供たちの姿は、当時の社会において彼らが負わされていた役割、すなわち大人の後継者となるための「準備期間」を過ごすという役割を表していると言えるのである。

4. 教育³⁾¹³⁾

文字の読み書きを基本とする「学校教育」は、ほとんどの庶民にとって無縁のものだったが、それはその種の教育が、文字の知識を必要とする職業人の養成を目的としていたためである。そのような職業人とはまず官僚であり、公的な祭祀、医術や呪術に携わっていた神官である。官僚や神官になるには文字の知識は不可欠であり、文字を習得して書類の作成・管理を担当する「書記」となるのが、経歴の第一歩であった。また、官僚や神官以外に読み書きの能力が必要とされた職業として、当時の「芸術家」、すなわち碑文をともしなう壁画や浮彫、彫像などを制作する職人があげられる。彼らの仕事には、草書体のヒエラティック（「神官文字」）で書かれている碑文の原稿を楷書体のヒエログリフ（「聖刻文字」）に直して下書きし、それに彩色や彫刻を施して仕上げるという作業が含まれていた。これらの作業は下絵師や絵師、彫刻師が分担していたとはいえ、文字に対する高度の知識が必要とされたことは疑いない。官僚に比べれば低い身分だったものの、このような高度の技能を身につけた職人たちは一般庶民に比べて高い地位にあり、たとえばデイル・エル＝メディーナの職人村の住民には国家から潤沢な給与が与えられていた。

このように、読み書きができることは高い地位と安定した生活への鍵であるとともに、誇るべき「ステータス」でもあった。しかし文字を学ぶには長い期間と多くの費用がかかったため、文字教育を受けることができたのはおおむね官僚や神官、芸術家の子弟に限ら

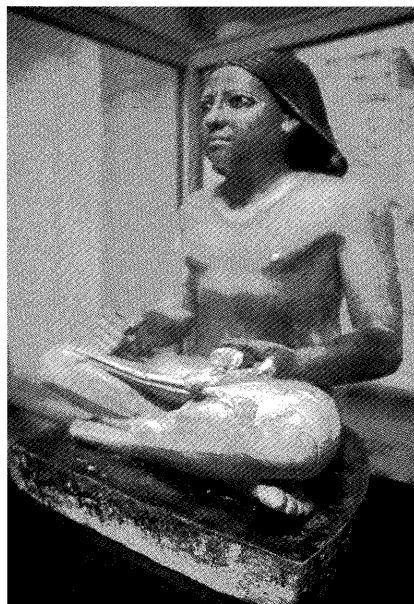


図4. 書記像
(古王国時代：エジプト博物館〔カイロ〕所蔵)

れ、それ以外の庶民の子供たちが文字を学んで中流以上の階層への仲間入りをするのは困難だったとみられる。また、学校教育が「職業教育」の性格を持つ以上、それは、主婦以外の職業につけなかった少女たちにとってもほぼ無縁なものだった。とはいえ読み書きのできる男性（おそらくは夫や兄弟）から文字を教わったとみられる女性もあり、女性の記した書簡が何通か発見されている。また、王家をはじめとする上流階級の女性も、おそらく少女時代に、「たしなみ」として文字を学んでいたであろう。

文字が教えられていた学校（「書記学校」）はどのようなものだったのだろうか？古王国時代には王宮の内部に、王家の子供たちと貴族の子弟が教育を受けるための小規模な施設があったとみられるが、教育はほとんどの場合、個人指導でなされており、官僚の子弟は父親の教えを受けるか、あるいは経験豊かな高級官僚に生徒として預けられた。教師となった高官は生徒から「父」として尊敬され、やがて官僚となった生徒たちは恩師の「息子」として、その老後の世話を引き受けることとされていたのである。古王国が崩壊した後の混乱期を経て成立した中王国時代には、王に忠実な官僚の養成が急務となり、身分や家柄に関わらず有能な人材を育成するため、文字教育の普及がはかられた。古代エジプト語の単語に「学校」を意味するとみられる単語（アト・セバァ「教えの部屋」）が出現するのはこの頃であり、各地に書記学校が設けられ、王宮の教育施設も拡張されて、この時期に台頭してきた地方有力者など中産階級の子弟も数多く学ぶようになった。しかし書記学校の遺構はまだ確認されておらず、その規模や生徒数など不明の点が少なくない。

第19王朝時代のアムン大司祭バクエンコンスは、自分が書記学校で4年間学び、11年間の見習い期間の後に、神官となり大司祭として勤めあげるまで70年を過ごしたとする碑文を残している。彼が当時としては長命といえる90歳前後まで生きたとすれば、その入学は5～6歳頃ということになるが、おそらくそれが書記学校の一般的な就学年齢だったのであろう。生徒は、少なくとも新王国時代以降は、まず読み書きを学習し、次いで算術や幾何、地理を学んでから、自分が志望する職業のための専門科目、すなわち行政や医術、宗教儀礼、芸術、外国語などに進んだが、専門科目の多くは官庁や神殿、芸術家の工房での「見習い」からなっていたとみられる。

生徒の用いた文房具としては、イグサの茎から作った筆のほかに、「ノート」として、木の板に化粧漆喰を塗った「書字板」があった。この書字板は、表面に書かれた文字を布で簡単にふき取ることができたので繰り返し使え、表面の漆喰がはがれても、塗り直せば再利用できたから便利だった。しかし「ノート」としておそらくもっと一般的だったのはオストラコン、すなわち土器片や石灰岩の破片である。オストラコンは書字板にくらべてはるかに安上がりであり、とくに石灰岩の破片は砂漠に行けばいくらでも拾えるから、学習用ばかりでなく簡単なメモや書簡を記すのに広く使われていた。一方、古代エジプトの「紙」であるパピルスは、生徒の「ノート」として使われることは稀であり、むしろ教師が用いる教本を記すために利用されていたとみられる。

新王国時代後期（第19～20王朝）の書記学校の場合、生徒が最初に学んだのは、書簡の挨拶文や、墓の碑文に使われる決まり文句などさまざまな例文を集めたケミイトと呼ばれる教本だった。しかしそれは中王国時代初期（紀元前2000年頃）にその頃の文語（中期エジプト語）で書かれたものだったから、生徒たちは、彼らにとって800～1000年ほど昔の「古文」を最初に学んだことになる。このケミイトを修了した後に習うのも、やはり中期エジプト語で書かれた「古典文学」であり、そのなかにはそれ以前の古王国時代にまでさかのぼる『ハルジェデフ王子の教訓』、『宰相プタハホテプの教訓』などの「教訓文学」が含まれていた。これらは古王国の支配階級が子孫に残した处世訓の形をとるもので、官僚としての心構え、上司や目下の者に対してとるべき態度などが説かれている。一方、中王国時代に作られた教本には、王に対する忠誠心や祖国愛を生徒たちに植えつけ、彼らの向学心を刺激し強めようとする傾向がうかがえる。そのなかにはたとえば、国王が統治者としての重責を担っていることを説く『アメンエムハト1世の教訓』や、逃亡者である主人公が異国での冒険の果てに、寛大な王の許しを得て祖国エ

ジプトに帰還するという『シヌへの物語』、そして、書記以外の職業がいかに苦しく辛いものであるかを述べ、それに対して書記の身分がいかに高く、その仕事がいかに楽なものであるかを説いた『ドゥアケティの教訓』などが含まれる。

このような「古典文学」は文字教育ばかりではなく、本来は生徒に対する思想教育も目的としていたと思われるが、それらの作品が書かれてからはるか後の新王国時代に生きていた生徒たちには、そうした効果は薄かったに違いない。しかし古代エジプト社会は伝統と慣例を重んじる傾向があり、伝統的な教本は、実際教育効果の如何にかかわらず継承されたのである。しかも授業は、生徒が教師の唱える文章や単語を復唱したり、教本を書き写して暗記するという方法で行われており、教本の内容よりも「形」を覚えさせることが優先されていたとみられる。また、現代の語学のように個々の文字から学ぶのではなく、草書体のヒエラティックで書かれた単語や文章の形をそのまま覚えるという学習法がとられており、文法の理解などは二の次とされていた。一方、楷書体のヒエログリフを学ぶのは後回しにされており、碑文の知識が必要な「芸術家」のための専門科目だった可能性がある。論理的な思考や創造力の育成よりも「形式」を覚えることが重視されたこの種の授業は、生徒にとって辛く退屈なものだったに違いない。しかもその指導法は厳格で、教師が生徒をむち打つことも稀ではなかった。

難しい「古典」の学習を終えると、生徒たちはようやく、彼らの日常言語である後期エジプト語で書かれた教本を学ぶこととなる。この段階の教本として広く用いられたのは、さまざまな文書の模範例を集めた『文集』と呼ばれているもので、報告書や命令書などの公文書のほか、書簡や教訓、神々への讃歌や祈禱文などが含まれるが、とくに教師あるいは年長の書記が文字習得の利点を説くという教訓や書簡が多くみられる。そのような教本としてはまず、『ドゥアケティの教訓』と同様に、書記以外の職業の辛さを説いたものが挙げられるが、それらの職業のなかでも特に槍玉にあげられているのが軍人である。

新王国時代は、エジプトが戦争によってナイルの谷の外に領土を拡大した時期であり、職業軍人の社会的地位が高まった時代であった。たとえ文字を知らなくても軍人として出征し手柄をたてれば立身出世の可能性があったのである。当時の少年たちにとって、ひたすら教本を暗記するばかりの退屈で息の詰まるような学校生活よりも、スリルと栄光に満ちた軍人の生活のほうが、はるかに魅力的に見えたであろう。職業軍人の募集は10歳前後の男子を対象にしており、少年たちのなかには兵士になろうとする者も少なくなかったと思われる。こうした状況は、後継者の育成をめざす官

僚層にとって脅威であった。そのため、『文集』には、新兵となった少年が兵営に閉じこめられ、軍事教練で痛めつけられる有様が繰り返し述べられ、その一方で、文字さえ習得すれば、書記としての地位と安楽な生活が約束されるだけでなく、租税さえも免除されるといように、書記の職業が持つ利点がいささか誇張されて説かれているのである。

官僚などの「エリート」養成のために行われた学校教育の背景には、子供をもっぱら大人の「予備軍」とみなす当時の社会通念があったと言える。子供たちは何よりも大人たちの社会的役割を引き継ぐことを期待されており、そのために教育され、鍛えられるべき存在だったのである。

5. 子供たちの世界³⁾

もちろん、そうした大人の思惑とは無関係な、子供だけの純真無垢な世界が当時も存在していたことは言うまでもない。たとえばいくつかの遺跡からは、鞠やコマ、糸を引くと動く仕掛けになっている動物の像や人形まで、さまざまな玩具が発見されている。このような玩具の多くは高価なものだったから、特別な玩具を使わなくても友人同士で楽しめる「遊び」も広く行われており、古王国および中王国時代のいくつかの貴族墓にはそのようなさまざまな「遊び」を表した浮彫りや壁画がみられる。そのなかには2人の子供が中央に立ち、両手に友人たちをつかまらせて旋回するガフ・イアレト（「ブドウ絞り」）など、男女がともに参加する遊びもあったが、多くの遊びは男女別々に行われ、女子の遊びとしてお手玉や、4人の少女が2つの組にわかれ、馬の役の1人の背中にもう1人がのって鞠を投げあうという騎馬戦と球技が合体したような遊びがあった。一方、男子の遊びには、レスリングや力比べ、地面にすわった仲間が突き出す両腕を跳び越す遊び（現在では「ガチョウ跳び」として知られるもの）、敵を捕虜にしたり、捕らわれている仲間を救い出すという「まねごと遊び」などがみられる。

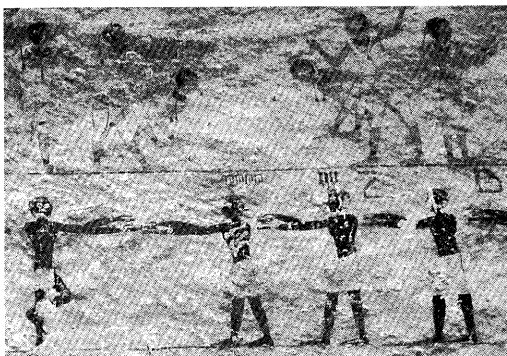


図5. 遊ぶ子供たち：中王国時代の墓壁画（上段に騎馬戦のような球技をする少女たち、下段には歌い踊る少年たちが描かれている）

しかしこうした屈託のない幼年期はやがて終わり、子供たちは大人となるための訓練期間へと入っていくこととなる。彼らはあくまでも社会的に未完成な「未熟な大人」とされ、大人の持つべき知識や価値観をすみやかに身につける必要があるとされていたのである。こうした「押し付け」に対して、当時の子供たちが少なからず抵抗を覚えたであろうことは容易に想像できる。書記学校の教本のひとつであった『アニの教訓』の末尾には、教師である書記アニとその生徒の間に交わされる議論が記されているが、これはそのような子供の側の言い分を示した（当時としては）珍しい資料と言えるだろう。¹⁴⁾ 師の教えが難しく理解できず、覚えることができないと訴える教え子に対して、アニは、動物でも訓練によって学ぶことができるのだから、人間にそれができないはずはないと主張する。人間にはそれぞれ能力差があるので、強制的に勉強させられても無理であるとする教え子の反論にもアニは耳を貸そうとはしない。両者の議論は決着がつかないままに終わっているのだが、古代エジプト社会においてはアニの主張のほうが正しいとされていたことは確かであろう。

6. おわりに

しかしそれでもなお、この議論は当時の子供の側の言い分をわずかとはいえ示している点で興味深い。古代エジプト人は、子供の持つ社会的意義を重視しながらも、子供には子供の立場があり、子供であるということにもそれなりの意義があることを、おそらくは感じとっていたであろう。墓の壁画や浮彫に表現された子供たちの遊びの場面は、彼らが無邪気に遊ぶ姿もまた、来世へと持ち込まれるにふさわしいイメージのひとつだったことを物語っている。古代エジプトの人々にとって、子供たちはまぎれもなく世界にあふれる「生命力」のひとつであり、世界が神聖な秩序（マアト）に守られていることを実感させてくれる証のひとつだったのである。

文 献

- 1) 内田杉彦：古代エジプトの「死後の世界」．明倫齒誌，5 (1)：58-63，2002
- 2) 内田杉彦：古代エジプト人と神々．明倫齒誌，7 (1)：39-44，2004
- 3) Janssen, Jac. J. and Rosalind M. Janssen: Growing up in Ancient Egypt. The Rubicon Press, London, 1990
- 4) Robins, Gay : Women in Ancient Egypt. pp.56-91, British Museum Press, London, 1993
- 5) Nunn, John F.: Ancient Egyptian Medicine. pp.191-197, British Museum Press, London, 1996

- 6) Pinch, Geraldine: Votive Offerings to Hathor. pp.13-25, 198-234, Griffith Institute, Oxford, 1993
- 7) Meskell, Lynn: Private Life in New Kingdom Egypt. pp.62-87, Princeton University Press, Princeton and Oxford, 2002
- 8) 内田杉彦：古代エジプト人と病気. 明倫歯誌, 3 (1): 60-66, 2000
- 9) Borghouts, J.F.: Ancient Egyptian Magical Texts. pp.41-42, E.J.Brill, Leiden, 1978
- 10) 内田杉彦：エジプト美術入門. 明倫歯誌, 4 (1): 76-81, 2001
- 11) Blackman, A.M. and M.R.Apted: The Rock Tombs of Meir, Part V. plate XXX, Egypt Exploration Society, London, 1953
- 12) Roveri, Anna Maria Donadoni(ed.): Egyptian Civilization: Daily Life. p.119(fig.158), Istituto Bancario San Paolo di Torino, Torino, 1988
- 13) Fischer-Elfert, Hans-W.: Education. Redford, D. B. (ed.): The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol. 1. pp.438-442, Oxford University Press, New York, 2001
- 14) Lichtheim, Miriam: Ancient Egyptian Literature, Vol. 2. pp.144-145, University of California Press, Berkeley, 1976